

「猫を巡って」

—初稿—

2026/2/22

〈人物表〉

秋山太郎 あきやまたろう

(28)

しがないサラリーマン

藤本 薫 ふじもと かおる

(28)

太郎と同棲解消した元カノ

藤本由美 ふじもと ゆみ

(21)

薫の妹・実家暮らしの大学生

1. 太郎のマンション・外観（夜）

マンションの一階居室。リビングから漏れる明かり。

2. 太郎のマンション・リビング（夜）

よくある1LDKの間取り。

その一角、ペット用の皿に入ったまま手付かずの餌。

秋山太郎（28）、落ち着かない様子でウロウロ。

太郎 「これ、漫画は？ てか本棚もだよね？」

藤本薫（28）、テキパキとスーツケースに荷物を
詰めていて、太郎には一瞥もくれない。

薫 「（ぶっきらぼうに）いらない」

太郎 「ああそう。洗面台に化粧品あったけどあれは？」

薫 「いらない。捨てといて」

太郎 「これは？」

と、椅子に掛けてあった猫のクッションを取る。

薫 「いらない（つてば）」

太郎 「あのさ、僕だっていらないから聞いてんだからね。粗大
ゴミ出すのもタダじゃないし」

薫 「じゃあ請求してください」

太郎 「何その言い方。請求しろってさ、僕の労力は？」

薫 「じゃあそれも。請求してください」

薫、ペット用のキャリーバッグを開く。

と、何かに気づいて、部屋の至る所を探し始める。

太郎 「何でもかんでもお金で解決しようってさ、君……」

薫、椅子を引いてテーブルの下を見るも何も無い。

太郎の声 「君はもう出てくから気にしないだろうけど、この後片
付ける僕の気持ちとかって想像できないんだろうな」

薫、ソファの裏を見るも、何も無い。

太郎の声 「そんな風に言われたら惨めな気持ちで片付けなきゃな
んないだろ。そういうこと君はさ——」

薫 「チョボは？」

ベランダへの窓、開いたまま。風で揺れるカーテン。

3. マンション近くの道（夜）

二人、懐中電灯とマタタビなど猫グッズを手に辺りを探し回っている。

太郎 「チョボー？」

薫 「チョボちゃん？」

4. マンションの脇の植え込み（夜）

二人、植え込みの木々の間を覗き込む。

太郎、木の間に手を入れるも、古びた新聞紙を掴む。

5. 駐車場（夜）

二人、車の下を覗き込む。

気づかずコッソとぶつかって、睨み合う。

6. 細い裏路地（夜）

懐中電灯で照らすと、猫が数匹。

一匹ずつ確認するも太郎、肩を落とす。

7. 太郎のマンション・リビング（夜）

太郎のノートPC。画面には文書作成アプリで「迷い猫 探してます」の文字と、チョボの写真など。

太郎 「とりあえず商店街に貼ってもらえないか頼んでみる」

薫 「……ありがとね」

薫、立ち上がり、スーツケースとペットキャリーを持って玄関に行こうとする。

太郎 「え、なんで？」

薫 「え？」

太郎 「それ」

と、ペットキャリーを指差す。

太郎 「見つかるならこの辺でしょ。また持ってくるならいいけど」

薫 「ああ、そうか」

と、ペットキャリーを置こうとするも、

薫 「え、そしたら私、取りに来るって事？」

太郎 「一旦僕が預かることになるんじゃない？」
薫 「いいよ。見つかったところに直接取りに行くから」と、再びペットキャリーを持って行くとする。

太郎 「いや、これ、僕の電話番号書いてあるから」と、PC画面を指す。

薫 「見つかった場所だけ教えてくれればいいじゃん」
太郎 「急に女の人が取りに来たらびっくりするでしょ」

薫 「しくない？」

太郎 「するって」

薫 「じゃあ私の電話番号にしといて」

と、PCを触ろうとする。太郎、押しのけて、
太郎 「いや、それは。商店街のお店に配るわけだからさ、一応住んでる人の連絡先の方がその、道理としてさ——」

薫、ドンっと、再びペットキャリーを置く。

太郎、驚く。

薫、気の抜けたような顔になって、

薫 「……今日で全部スッキリするつもりだったのになあ」

太郎 「……はあ？ ただの親切なだけけど。どうしていちいちそうやって嫌な気持ちにさせるの君って」

薫 「ねえ、君って呼ぶのやめてってば」

太郎 「……それは、ごめん」

薫 「もう、別にいいけど」

8. 商店街の魚屋の前（昼）

太郎 「三毛猫で、お腹のあたりに黒いハートみたいな斑点があるんです。よろしく願います」

と、深々と頭を下げる。

魚屋夫婦の店主と女将、笑顔で頷く。

ポスターの束を片手に隣の店へと駆け出す。

太郎 「すみません。猫を探してて……」

9. 薫の職場オフィス（昼）

薫、デスクでパソコン仕事中。

と、上司がやってきて、

上司 「藤本さん、ちょっといい？」

薫 「はい？」

上司 「……プロジェクトの件さ、考えてくれた？」

薫、不意を突かれて狼狽える。

薫 「……すみません。まだちょっと、決められてなくて」

上司 「そっか。引き続き藤本さんPMで行こうと思ってるから」

薫 「はい」

上司 「来週中にはお願いね」

薫 「すみません。ありがとうございます」

と、どこか浮かない顔。

スマホに通知。画面を見ると「商店街に貼り紙して

もらった」 「公園の掲示板にも」 などなどこまめに

太郎からの連絡。「ありがとうございます」とだけ返事。

10. 太郎のマンション・リビング（夜）

太郎 「そうですね。ごめんなさい、そちらの子じゃないです」

と、電話を切り、一息を吐く。

床には大きな旅行鞆やキャリーケースが広げられて

いて、荷造りの途中。

その一角、ペット用の餌。手付かずのまま。

11. 薫の実家・リビング（夜）

薫、タオルで髪を乾かしながら風呂場から出てくる。

と、妹・藤本由美（21）がちょうどやってきて、

由美 「あれ、お姉ちゃん何でいんの？ 喧嘩した？」

薫、素通りしようとして、捕まる。

由美 「ねえってば」

薫 「……別れた」

由美 「えー！ なんで？」

と、絶句。

薫 「うるさい」

由美 「え、なんでなんでなんで？」

薫、由美のやかましさに諦めて腰を下ろす。

由美 「こんなにお姉ちゃんのこと好きな人いないって、自分で

言ってたじゃん」

薫 「そうだっけ」

由美 「言ってたよ」

薫 「まあ、それは今でもそうなんだと思う」

由美 「急にノロケないでよ」

薫 「なんでかなんて、知らないよ」

由美 「は？」

薫 「フラれたの」

由美 「えっ？」

薫 「フラれたの。アメリカに転勤するの嫌だって駄々こねたら、なんか喧嘩しちゃって」

由美 「仲直りすれば？」

薫 「まあ、会えなくなるのはそうだしさ」

由美 「お姉ちゃんが着いてればいいじゃん」

薫 「私だって今会社で大きいプロジェクト任せれそうなの」

由美 「何それ。わざわざウチからチョコ奪ってまで同棲したのに。ただの言い訳でしょ」

薫 「うるさい」

由美、合点が行かず、

由美 「お互い好き同士で、なんで別れんのよ」

12. 商店街の魚屋（昼）

魚屋の女将、腕を組んで満面の笑み。

対する太郎、手にはペットキャリー。

中でチョコボが毛繕い。

女将 「よかったねえ」

太郎、控えめに頭を下げる。

女将 「……もっと喜ぶのかと思ってた」

太郎 「え？」

女将 「あんなに必死に走り回ってたから。ものすごい形相だったじゃない。だからこの子のこと、覚えてたんよ」

女将、ペットキャリーを小突く。

女将 「もう勝手に出てっちゃダメだぞ。こんな大事にしてくれる人、なかなかいないんだから」

と、奥で居眠りしていた店主がくしゃみ。
女将 「お兄ちゃんもね、大事なんだったら手放しちやダメだよ。
猫も、女の子も。はははは」
太郎 「あ、ははは」
と、愛想笑い。

13. 太郎のマンション・リビング（夜）

リビングは片付けられていて、もぬけの殻。
太郎、大きなキャリーケースや荷物を持って玄関へ。
と、インターホンが鳴る。

14. 太郎のマンション・玄関（夜）

太郎、チョコボの入ったペットキャリーを差し出す。
薫、受け取る。
薫 「ありがとう」
太郎 「……じゃあ」
と、閉めようとする。

薫 「もう、行くの？」
太郎 「……うん」
薫 「中入ってもいい？」
太郎 「え？」
薫 「……エサ、あげようかなって」
太郎、腕時計を見て、
太郎 「ごめん、飛行機すぐだから」

15. マンション近くの道（夜）

太郎 「……どこまで着いてくんの？」
と、キャリーケースを引いてスタスタ歩いている。
薫 「私もこっちだから」
薫、着いていくが、チョコボが重そう。
太郎 「ああそう」
薫 「うん」
太郎 「いいな。チョコボは」
薫 「え？」

太郎 「こうやって迎えに来てもらえてさ」

薫 「無理やり連れてきたんだから、責任くらい取りますよ」

太郎 「僕が帰ってくる時も、誰か来てくれないかな」

薫 「私も」

太郎 「え？」

薫 「チヨボが羨ましい。私みたいなこーんなに思ってくれる人がいて。私がどこに行く時でも、彼氏と同棲することになっても同棲解消しても、いつでもそばにいてくれて」

太郎 「あかさ」

薫 「そうやって。無理やりにも連れてってくれる人がいて」

太郎 「それは君が仕事があるって——」

と、薫に睨まれる。

太郎 「ごめん、薫が。薫が、こっちでの仕事頑張りたいって言ったからじゃんか。僕だっけと一緒にいると思ってたし、いたかったけど、仕方ないだろそれは」

薫 「重い」

と、立ち止まる。

太郎 「……ごめん」

薫 「……これ(のこと)」

と、ペットキャリーを差し出す。

太郎、受け取る。

太郎 「……重いな」

太郎、荷物だらけになり、身動きが取れない。

と、タクシーが通りがかり、太郎、止める。

バックドアにキャリーケースを入れて、ペットキャリーを持ったまま、客席に乗り込む。

薫、あっけに取られる。

太郎 「(運転手に) 空港まで」

薫 「ちよっと？」

太郎 「だって、どこまでも着いてくるんですよ」

キャリーの中のチヨボ、呑気そうにあくび。

薫、観念して笑う。太郎の手を取って、乗り込む。

走り出すタクシー。

(おわり)